

「もう大丈夫ですよ。それではお大事に」、これは良くなられた患者さんへの定番の言葉です。気管支炎をこじらせ3週間も続いていた咳が、クリニックを訪れすぐに治った小島香さん(仮名、28歳)にもこの返事をしました。これでいったん終了となる予定でした。しかし、なかなか診療室から出ようとしません。「先生、もうひとつ診てもらっていいですか」。患者さんから信頼を得てラポールな関係になれた瞬間です。

汗の失禁

「手のひらに汗が出て困っているのです。ほかの人より汗が出やすい体質なのでしょう。治してもらえますか」と追加の訴えをされました。

「汗は、出て当たり前なんだよ」と諭すように、そして次に待ってられる患者さんに気を遣いながらも、小島さんの手を診てみました。なんと手のひらがびっしょり濡れているのです。

「ん～。これは出すぎだね」。発汗異常となると、内科的にはまず「甲状腺機能亢進症」が考えられます。疲れやすい、手が震える、食欲はあるものの痩せがちになる、などの症状も合併してきます。また、心不全の方は食事や階段の上り下りなど少しの体動で額に汗をかかれます。さらに更年期障害や精神的ストレスなど、自律神経の障害でも顔や首筋に突然汗が染み出すことがあります。しかし、小島さんはそんな状態ではなく、手のひらが汗の失禁状態でした。汗がこぼれているのです。

鉛筆が持てない

「実は子どもの時からなんです。最近はお勤めで……」と言って声を曇らせてしまいました。聞いてみると、アパレル業界に勤めていた小島さんは、洋服などの商品を手で扱うと、汗で生地を濡らしてしまうのです。最初はハンカチなどでぬぐったりと気をつけていても、やはり生地に染み

をつけてしまい、このことが原因で会社を辞めざるをえなかったと涙を浮かべて話してくれました。小中学生の頃は汗で鉛筆が滑ってしまい、字を書く授業がつかったことや、友人の家に素足で行くと、汗で畳に足跡がついて恥ずかしい思いをしたことなども話してくれました。こうなると診断名は「多汗症」です。

多汗症で人知れず悩まれている方は100人にひとりいるといわれ、なぜか今、増えております。これは交感神経の過剰緊張で、あまり暑くもないのに手のひら、脇の下、足の裏など局所から汗が噴き出すように出てきます。握手も苦手となり対人関係に支障も出てきます。なかなか内科的には治りにくいのですが、小島さんには精神安定剤と交感神経の興奮を抑えるβブロッカーの「アロチノロール」という薬を出し、様子を見てもらうことになりました。

手術という選択

2週間後、彼女は来院し、やや発汗は収まったものの満足ゆく効果ではないことを告げられました。小島さんの顔に不満が表れています。長引いた咳を見事に治した時の余裕はありません。専門書を調べ、汗を抑える薬を探し、「塩化アルミニウム(テノール液)」という名前の塗り薬を薬局で求めるようすすめました。「これを試してみてもいいでしょう」。そして2週間後、彼女は現れました。「まだ汗は止まりません」。

内科医として打つ手がすべて封じられ、ラポールな関係に赤信号が点滅しだした瞬間です。この多汗症の最終治療としては、胸部交感神経節の切除という手術があります。専門違いの胸部外科のお医者さんに紹介状を書きました。「しっかり手術してもらえば大丈夫だからね。それではお大事に」。そう言う私の手のひらに冷たい汗がにじんでいました。



ふくお・よしひろ (一財)博慈会老人病研究所所長。少子高齢社会における未病ケアシステムの構築を提唱している。21世紀医療課題委員会代表。著書に『臨床判断ハンドブック』『見た目で見えがわかる』『未病息災』『セルフ・メディカ』など。